

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

村上春樹・江國香織小説研究——親密性をめぐって

氏 名

堀口 真利子

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、村上春樹および江國香織の小説作品における、恋愛・家族・セクシュアリティに関する表現について、「親密性」という観点から分析を行い、その批評性について明らかにした。本論文は、序章・終章、および九つの章から構成されているが、序論と結論を除く各章は、二部に分かれている。

第I部は、第1章から第4章によって構成されており、村上春樹文学（以下、村上文学）、中でもとりわけ「恋愛小説」に焦点を当て、その親密性について議論した。第1章では、『ノルウェイの森』を取り挙げ、家族関係において未解決のままに残されたセクシュアリティの問題が、新たな親密性のなかでどのように変奏していくのかを議論した。従来、異性愛体制を基盤にした読みによって解釈されてきた本作を、緑をめぐる家族問題に焦点化することにより、新たな読みを提示した。主体性を持つ緑が、「僕」との親密性のなかに置かれることで、男性のセクシュアリティに依存するようになり、主体から離脱していく、その弱さと傷つきやすさの問題を議論した。この分析から、緑の「僕」に対する過剰な愛情表現は、実は疑似的な父との結合を欲望するものであったことを明らかにした。

第2章では、男性中心主義的な親密性について議論を行った第1章とは逆に、女性が主体性を獲得する契機を描いた村上の短編「飛行機——あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」を取り挙げ、分析を行った。先行研究では、「専業主婦の抑圧の構造」を持つものとして解釈されてきたが、本章では、母娘関係に焦点をあて、語る娘と語られる母の問題を議論した。母娘の関係性を、村上文学がどのように表現してきたのか、その根幹にある図式を明らかにすることを目論んだ。禁圧的な母親から受けた、未解決の心の傷を負う「彼女」が、「僕」との親密性において母娘関係を再演することで、問題解決を試みる過程を分析した。この分析により、男の主体をコントロールし、男の主体を再構築するなかで、自らの主体性を獲得することを明らかにした。

第3章では、『1Q84』を取り挙げ、村上文学において女同士の連帯、女性同性愛関係というセクシュアリティがどのように表現され展開したのかを分析した。この分析からは、従来の上文学において描かれてきた〈男が行使する暴力〉に対抗する暴力が、女同士の親密な連帯のなかから生起することを議論した。

第4章では、短編集『東京奇譚集』に収録された短編「品川猿」を中心に議論した。村上文学と90年代という問題性との関連を「偶然性」というキーワードによって議論したうえで、短編集全体に通底する、自己の生の細分化を避ける手段として、他者への暴力を行使することの問題性を議論した。故に、他者同士の親密性を築くことの不可能性、その限界性が描かれていることを明らかにした。

第II部は、続く第5章から第9章によって構成されており、江國香織文学（以下、江國文学）について議論を展開した。恋愛小説がその中心にある江國文学であるが、それら小説において描かれる親密性が内包する問題性について、女性登場人物の主体性と暴力の結びつき等に注目しながら以下の通り論じた。第5章、第6章においては、江國文学の家族の親密性に焦点をあて、その問題性を検証した。第5章では、『流しのしたの骨』について論じた。まず、家族という親密性のなかに生じる男性支配構造の暴力性を検討した。家族の親密性は、父親の規律に家族が馴染むことによって強度を強めるとともに、個の主体性の剥奪を意味するものである。すなわち、家族内における男／女の支配—被支配の力学を浮上させるものであった。このような男性ジェンダーにおける暴力性は、父から息子へと受け継がれていく、いわゆる世代連鎖の問題として議論した。女性ジェンダーは、家族という親密性のなかにおいて、これら男性ジェンダーによる抑圧構造に抵抗するために連帯化をはかることを明らかにした。

第6章では、第5章『流しのしたの骨』の家族の潜在的問題を引き継ぐ形で描かれた『思いわずらうことなく愉しく生きよ』について分析を行った。本作では、特に家庭内暴力における構造的問題を明らかにした。男性ジェンダーによる暴力表象を分析するにあたり、犬山家の父親の暴力性と、麻子・邦一の家庭内暴力という比較分析を行うことで、暴力が、二つの親密性に連鎖する問題として考察した。

第7章では、『落下する夕方』を取り挙げた。従来、異性愛関係を前提とする失恋するまでの物語という解釈によって評価されてきた本作において、本章では、恋愛関係に収斂されない身体の「痛み」に着目し議論を展開した。この分析をするために、親密性の構築がどのように形成されるのかに焦点をあてて分析を行った。親密性を形成することで生じる「痛み」と、同じく親密性を形成することで消去される「痛み」が繰り返され、そのことで「痛み」が温存されることで、江國文学は、親密性の不可能性に接近してしまうことを明らかにした。

第8章では、『きらきらひかる』について分析を行った。江國文学は、ジェンダー規範をめぐる二項対立の狭間に置かれた者同士が集う親密性の形成とそこでの葛藤を

どのように描いているのかを分析した。本作は最終的に、性を無効化して成り立つ新たな関係性に辿りつくように見せながらも、異性愛至上主義におさまる親密性が優位的に描かれていることを論じた。

第9章では、短編小説「おそ夏のゆうぐれ」について論じた。男女の甘美な恋愛小説として解説されるテキストであるが、本章では、恋愛物語のパターンが転覆されていることを、登場人物である志那に関する「孤独」や「感覚」についての表現を分析することで明らかにした。本作は、男性が彼女の内面を支配するような表現を展開しているように読解されるが、セクシュアリティにおいて彼女は能動的な存在として、異性愛関係を解体してしまう存在として表現されていることを論じた。

以上の議論を踏まえて、終章では、村上文学・江國文学におけるそれぞれの親密性の特徴を比較することで、その批評性について考察した。村上文学においては、女性が共同体に亀裂を生じさせるような、暴力的な存在として繰り返し描かれていることが理解され、女性＝暴力というネガティブな結びつきが反復されて描き続けられていることが理解された。この暴力の形は、村上の最新作においても変奏しながら親密性のなか書き込まれていることを指摘し、纏めとした。また、江國文学においても、村上文学に描き込まれるこれら親密性の問題が描かれているのだが、単純に男性中心主義への対抗的な価値だけではなく、更に複雑な問題性をもはらんだ親密性も描かれていることを指摘した。

さらに、村上・江國の両文学は、「痛み」という点においても共通性を持っている。村上文学において親密性は、「痛み」と分離しがたく、親密性の不可能性を生み出すが、江國文学においても、親密性を形成し、崩壊することの繰り返しによって「痛み」は温存されることで、親密性の不可能性に接近してしまうという共通性を見出した。また、両文学の違いについて、村上文学において「痛み」は、ある種の恋愛や性愛の不可能性を際立たせるような悲劇のようなものとして描かれる一方で、江國文学は、「痛み」を伴いながらも、それに柔軟に応答しながら、親密性の持続へと物語を進めるという点を指摘した。

江國文学が描き続けてきた男性中心主義的なものに対する応答と、女性に関わる親密性の問題が描かれること、そこから展開される批評性のひとつの側面を明らかにすることで、江國文学は、村上文学と近接しながらも、対立的と言える方向に向かっていることを述べた。